

言葉を科学する：人間の再発見

## Day 10                      ちょっとだけ feedback

・Q：19世紀前半の科学者たちの多くが、元素は説明に都合のよい道具ではあるが、そのようなものを物理的な実在としては考えていなかったように、21世紀前半の少なからぬ認知科学者たちが言語のパラメータを実在のものと考えていないというのはわかる。そして、元素はその後物理的な実在が次々と確認されてきたことも歴史の事実であるので、言語のパラメータも今後どのように研究が進展するかわからない。しかし、頭の中の言語能力に関して、そこまで実在にこだわる必要があるのだろうか？

**\* とても重要な問いですね。これは今日の授業で少し考えてみましょう。**

・Q：単純判断と総合判断に関して、「バス」の場合は、A bus has come と The bus has come のように使い分けることができるが、太郎のような固有名詞が主語の場合は、英語ではどのように言い分けるのだろうか。イントネーション・アクセントが変わるのだろうか。

**\* すばらしい質問です。文脈をきちんとコントロールする必要がありますと思いますが、文全体のプロソディ・イントネーションが変わるといった可能性は大きいと思います。**

・Q：生まれつき耳が不自由な人も、言語が話されていない環境で育ったのと同じようなもので、言語を理解できなくなってしまうのですか。

**\* よい質問です。これは言語能力の「領域固有性」の問題として、今日の授業の後半で考えてみます。**

・Q：ある言語で意味が1つの単語で統一される一方で、別の言語では数種類の単語で表されることがあったり、ある単語を別の言語では、ニュアンス的に示す言葉がない、といわれたりすることがあります。ハンドアウトの(29)「ある言語で表すことができる概念を別の言語で表すことはできないということはない。(そうであれば翻訳は不可能)」は本当なんだろうか？

**\* とても重要な質問です。「日本語の\*\*\*の意味は、外国語で表すことはできない」あるいは「英語の\*\*\*は日本語で表すことはできない」「北海道弁の「いずい」は標準語では言い表せない」などということを時々耳にしますね。これは確かにもっともらしいことかもしれませんが、本当でしょうか？(完全なパイリンガルはおそらくいないとすれば)誰が、どのような方法論に基づいて、ある言語のある表現は、別の言語では表すことはできない、という主張を合理的に行うことができるのでしょうか。このことは、あとで宿題でも取り上げることになると思いますので、そのときにじっくり考えてみましょう。**

**<以下、質問ではありませんが、宿題に対して、とてもよいコメントがたくさんあったので、いくつか紹介します>**

・文法上の違いについて日本語形式と英語形式に大きくわけて説明していたが、そもそも文

法上の違いを理解することは果たして必要なのだろうか。文法を気にすることなく無意識のうちに私たちは会話をする事ができる。本文のように説明をされることで日本語の文法について改めて考えさせられたが、重要なのは文法を理解することではなく実際に使えるかどうかなのである。多少の例外として、日本語とは語順が異なる言語を母語とする人にとっては文法を気にせず日本語を話し文法を理解することは異なる意味で捉えてしまう可能性があり厳しいことと思うが、私たちは日本語の文法を特別教えられたわけでもなく母語を話す事が出来ているので、結局は生まれた環境の言語を日々浴びているかどうかであると思う。第二言語を習得する際にも、机上で文法を学ぶよりはその母語話者を会話を行いその国に行くことが一番だと思う。とはいっても、最低限の文法の知識は重要である。ある点では文法が重要ではないと考えられる一方で、重要だと考えることも出来る。文法は重要であるから本文では言及しているのであろう。見方次第なのか。文法の重要性について考えさせられた。

**\* とても大切な考察です。どんなことにでも当てはまることだと思いますが、「必要かどうか」を問う場合には、何のためにか（目的は何か）をきちんと確認することが重要です。さらに考える上でのヒント：ここでの「文法」とはE言語のレベルの「文法」のことか、I言語のレベルでの「文法」のことか、あるいはそのような区別が難しいケースなのか。**

・本文で示されているように、各々の言語には異なる特徴もあれば、似ている特徴もある。そのことに関して現在、パラメータの組み合わせによって異なる言語が生まれ、多くの言語の事実が説明できるといわれている。しかし、私はそのような考えは果たして言語科学の解明につながらないのではないかと考えている。このことを、元素においての科学の概念と比較して説明していく。元素の存在により、化学的事実がうまく説明できることはパラメータが存在することによく似ている。しかし、化学の場合は元素を定義することで正確な数値などがでてきて、化学的な性質も説明できる。このことを確かめようがないのでつきとめても物質世界の実体を解明できないというかもしれない。だが、相手は物質であり、不変である。なので、私は元素というものが物質世界に存在するということを解明することはできると思う。一方、認知科学によるパラメータの場合はどうだろう。一見、元素と同じ感じに見えるかもしれないが、人間の考えは変わり続けるものであり、不変ではない。みんな、それぞれ異なることを考えており、パラメータというものを定義したからといって、答えを導くことはできないだろう。このようなことより、私はパラメータというものが言語学の解明に繋がるということは難しいのではないかと考えている。

・価値観や考え方というのは歴史を経て劇的に変わってきたものですが、(A) [言語のパラメータに関する 21 世紀の認知科学者の考え方]と (B) [物質の元素に関する 19 世紀の科学者の考え方]を比較すると、その時代では信じられていなかったものも後の時代では科学的に証明できるようになり、あたかも当然のように思われていたことが覆されてきました。しかし現在の問題となっている、言葉という「概念」を目視することは不可能に限りなく近く、果てしなく遠い、想像にすぎないようなことに思えます。

しかしこれは私が現代の価値観にとらわれているためであり、あと 200 年後にこの世に生まれていたら、きっと言葉を科学的に証明できることが当たり前になっているのだらうと思います。わたしたちはその時代の考え方にとらわれないための、新しいことを教えてもらっています。この機会を大切に、コペルニクスのように創世できるような人になりたい

と思いました。

・私は、(A) のような考えには、ある部分では賛成だがある部分では反対である。パラメータの仮説というのは論文をよんだ限り正しいと思えるし、多くの人もそう感じるだろうが、いまだ証明できていない以上、合理的な仮説にすぎないと思う。しかし、ドルトンの元素仮説がそののちの世界で証明されたように、言語能力の実態も現代の人々が想像もしないような、驚くべき手段で証明される時が来るかもしれない。そういった意味で、(A) のように人間の言語能力の真の実体を解明することはできないと言い切り、未来の可能性まで否定するという態度には同意できない。

また、今はパラメータというのを最小単位として考えているが、原子が原子核と電子に、さらに電子核を陽子と中性子という単位に分解できたように、パラメータをも包括するような、さらに微小な単位があるかもしれないということを念頭に置くことも重要だと考える。そういった視点からみると、主語の位置が特殊である理由も解明できるかもしれない。

・パラメータの中で最も興味深かったのは、単語の基本的な順番を決めるパラメータについてだった。E 言語としてみるとかなり違っているようにみえる言語も I 言語として語順をみると英語タイプと日本語タイプのほとんど 2 つに整理され、さらに 2 つのパターンはほぼ同じ割合で見つかるということにとっても驚いた。言語はもともと世界共通の部分があり、進化、発展し、現在のような多数の言語が存在するようになったのだろうか。

I 言語とは、「話し手の頭の中」に実在するものであり、「言語の内包的な特徴」であると書かれているが、自然科学が対象を扱うのと同様、実際に人間が持っている I 言語という「自然物」を理解することで、「言語の普遍性」を解明することができるのだろうと理解できた。

自然科学には、帰納法と演繹法の 2 つのアプローチがある。I 言語のアプローチは帰納法ではなく、演繹法による仮説 (モデル) の提示と実験による検証、反証を繰り返して、より真実に近づくものと思うし、言語学の「実験」の意味が何となくわかってきたような気がする。言語学における「実験」は物理学における「思考実験」のようだ。